http://www.music-communication.com

神戸女学院大学

東京音楽大学

音大連携による教育イノベーション

音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

平成 28 年度 活動報告書

このプロジェクトは文部科学省 平成 21 年度 大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラムに選定されました。

音大連携による教育イノベーション ～音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

平成 28 年度　活動報告書

目　次

はじめに …… 2

教員・スタッフ紹介・平成 28 年度活動概要 …… 3

平成 28 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」

1．第 1 回　演劇を用いたコミュニケーション・デザイン …… 4
2．第 2 回　音楽を通して社会の役に立つとは …… 6
3．第 3 回　インタラクティブ・コンサートの実践 …… 8
4．第 4 回　音楽とダンスで会話しながらコミュニケーションを考える …… 10
5．第 5 回　エル・システマジャパンが実践する音楽教育のイノベーション …… 12
6．第 6 回　東京音楽大学 実習報告会 …… 14
7．第 7 回　神戸女学院大学 実習報告会 …… 16
8．第 8 回　インタラクティブ・コンサート実施報告と相馬プロジェクト参加報告 …… 17
9．第 9 回　総括 …… 19

各大学実習報告

1．音楽ワークショップ　みないけキッズアーティスト「扉を開けたら世界旅行！」…… 21
2．東京音楽大学「音楽ワークショップ特別セミナー」ならびに
　みないけキッズアーティスト「みんなで作ろう音楽物語」…… 22
3．神戸女学院大学「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに
　第 7 回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」…… 24

おわりに …… 28

はじめに

共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション　―音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」は、平成 21 年度から東京音楽大学・神戸女学院大学音楽学部・昭和音楽大学の３つの大学が展開してきた取り組みで、文部科学省に３年間の財政支援を受けたのちも継続して事業を進めてきました。平成 27 年度から、共通科目である「ミュージック・コミュニケーション講座*」の配信を東京音楽大学と神戸女学院大学音楽学部の２大学のみに縮小し、開講日時も金曜に変更しましたが、専門力・社会性・コミュニケーション能力を備えた音楽人の育成という当初の目的は変わることなく、大学間連携の特色を生かした教育を実践しています。

今年度の講座では、前期にピアノや演劇、ダンスなど多様な分野のすぐれた講師を招聘して、アーティスティックなスキルを通じたコミュニケーションについて授業をして頂いた後、夏休み期間中に双方の大学でワークショプの集中的な学びの場を持つと共に、今年初めての試みとして、福島県相馬市でのエル・システマの活動に関わって参加をすることができました。このように音楽を介して社会に関わるルートを考える、開拓の努力をするという動きが少しずつ実現しているのはうれしいことです。

９月のワークショップ研修では、昨年度も招聘したギルドホール音楽演劇学校出身の講師２名を再度招いて、各大学で特別セミナー・特別研修を実施しました。同じ講師であっても昨年とはまた異なる手法で音楽づくりを展開する様子を目の当たりにし、ワークショップの多様性と柔軟性を改めて学び直すよい機会となりました。

この１年間の活動をここにご報告すると同時に、本プロジェクトにご協力いただきました皆様方に厚く御礼申し上げます。

2017（平成 29）年３月

津上智実（神戸女学院大学音楽学部　教授）

＊開講科目名
ミュージック・コミュニケーション講座 A・B（東京音楽大学）
ミュージック・コミュニケーション講座（神戸女学院大学）

教員・スタッフ（平成 29 年 3 月現在）

東京音楽大学	武石 みどり	東京音楽大学音楽学部	教授
	磯野 恵美		連携センタースタッフ
	高橋 英美		連携センタースタッフ
神戸女学院大学	津上 智実	神戸女学院大学音楽学部	教授
	永吉 りう子		連携ルームスタッフ
	朝山 加奈子		連携ルームスタッフ

平成 28 年度の活動

●ミュージック・コミュニケーション講座の実施

いずれもインターネット・ビデオ会議システムにより、2 大学間を結んで実施。

オリエンテーション：平成 28 年 4 月 22 日（金）	発信校：東京音楽大学
第 1 回：平成 28 年 5 月 13 日（金）	発信校：神戸女学院大学
第 2 回：平成 28 年 6 月 3 日（金）	発信校：神戸女学院大学
第 3 回：平成 28 年 6 月 17 日（金）	発信校：東京音楽大学
第 4 回：平成 28 年 6 月 24 日（金）	発信校：神戸女学院大学
第 5 回：平成 28 年 10 月 7 日（金）	発信校：東京音楽大学
第 6 回：平成 28 年 10 月 28 日（金）	発信校：東京音楽大学
第 7 回：平成 28 年 11 月 18 日（金）	発信校：神戸女学院大学
第 8 回：平成 28 年 12 月 9 日（金）	発信校：東京音楽大学
第 9 回：平成 29 年 1 月 20 日（金）	発信校：東京音楽大学

●その他の活動

平成 28 年 7 月 29 日（金）於：区民ひろば南池袋
音楽ワークショップ みないけキッズアーティスト「扉を開けたら世界旅行！」

平成 28 年 9 月 16 日（金）～ 18 日（日）於：雑司が谷地域文化創造館、区民ひろば南池袋
「音楽ワークショップ特別セミナー」ならびに みないけキッズアーティスト「みんなで作ろう音楽物語」

平成 28 年 9 月 20 日（火）～ 24 日（土）於：神戸女学院大学
「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに第 7 回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」

平成 28 年度　第 1 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 1 回ミュージック・コミュニケーション講座 「演劇を用いたコミュニケーション・デザイン」
講　師	蓮行（劇作家・演出家） 松岡 咲子（劇団員・アシスタント）
実施日時	2016 年 5 月 13 日（金）14:00 ～ 15:30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部　合奏室
講座の概要	第 1 回の「ミュージック・コミュニケーション講座」は昨年度に引き続き、演劇とワークショップで幅広く活動されている蓮行氏を講師としてお迎えし、神戸女学院大学からの発信で実施した。 講師の略歴、活動紹介の後、まず「不親切グラフ」の説明があった。これは、縦軸と横軸がそれぞれ「与える側の親切度」と「受け手の達成度」とを表し、親切度が高くなるほど受け手の達成度は低くなるという反比例のグラフである。蓮行氏とアシスタントの松岡氏による、自動車教習所の車庫入れ教習を例にとった寸劇がなされ、「皆さんのためにあえて不親切に講義を進める」との宣言があった。 まずは、「歩く＆止まるゲーム」を行った。「これは、古代ギリシャから伝わる秘奥義である。うろうろと歩き回ると自分の足跡がつき、自分の足跡を踏んでしまうと『ボカーン！』と言うゲームだ。」との説明があった。学生は何を意図しているゲームなのか分からず、困惑しながら歩きまわっていた。 次に、「属性ゲーム」を行った。これは、自分の異なる属性の人と三人組を作り、それぞれのグループでいくつ違っている点を見つけられたのかを発表し、相違点の数の多さを競うゲームである。 二つのゲームを行った後、これまでのゲームの意図が説明された。「人間は命令されるとやる気を失うため、ゲームを通して目的を遂行させた方が効果的。イスに座っている状態から立たせて、『バラバラになれ』と言うよりも、『歩く＆止まるゲーム』のルールを使ってうろうろと歩かせた方がストレスがない。『属性ゲーム』も同じく、『自己紹介をしてください』と言い、相手の情報を一生懸命に引き出さなくても、ゲームを通してスピーディーに相手の情報を知ることができる。」と述べた。このように、まっすぐ目的を示すのではなく、わざと迂回させることを「バイパス効果」と呼んだ。どのようにバイパスを作っていくのかが重要となる。 次に、東京と神戸の一体感をつくろうと呼びかけ、「エナジー回し」を行なった。これは、エネルギーの塊を相手に向かって「ハッ！」という掛け声と共に投げ、受け手も「ハッ！」という掛け声と共に受け取る動作をするゲームである。熱いエナジーや気持ち悪いエナジーなど、ニュアンスの違いによって受け取り方を変化させ、学生たちは楽しみながら取り組んでいた。ゲームをやってみた後、このゲームは、相手が出した“言葉・気持ち”を受け取るトレーニングであることを学生に伝えた。 次に、直接民主主義を体験するゲーム、「件の宣言」を行った。これは、一夫一妻制度を維持すべしとするチームと、緩和すべしとするチームに分れ、それぞれを演じながら演説をする、というゲームである。演説を聞いた学生たちは、自分の意見はどちらであるかを紙に書いて投票した。住民投票に近い体験を通して、自分の価値観を示すことで何かが決まるというリスクがあることを、学生が感じられるように意図されたゲームであった。 最後に、「皆さんが大人になって民主主義社会で生きていくことは、ルールを守ることより、ルールを作るところにしっかり参加することが大切である。そして、自分の意見を持ち、相手の意見を聞きましょう。音楽をしているならば、それをツールとして社会をより良くしていくことが務めであり、自分の人生も豊かなものにしていこう。」と締め括った。

〈学生のことば〉

・「不親切グラフ」にものすごく納得しました。私は教師をめざしていますが、今回の講座は、人を惹きつける方法・話し方など、これからの私に大いに役立つことばかりでした。様々なゲームを通し、多くの人と接して楽しかったです。
（神戸 / ミュージック・クリエイション / ４年）

・「～をしなさい」と直接言うよりも､回り道になってもいいから別の道を作って、最終的に目的を達成させるというやり方を特に生かしたいと思った。これから教員免許を取ったりする場合に生かしていきたい。（東京 / ピアノ / ３年）

・大学生活を送る中で、昨年も曲を作りましたが、舞踊との共演に力を入れています｡曲は私が作り、それを聴いて舞踊専攻が振りをつけて、みんなで練習します。その時、むずかしさもあり、日常生活の合間を縫っての練習にストレスを抱える人もいました。そこで、講義で教えて頂いたもので、皆をスムーズに動かせないかと思いました。
（神戸 / ミュージック・クリエイション / ２年）

・今回、蓮行流演劇ワークショップを受けて一番に思うのは「とてもおもしろかった」ということです。１時間半で自分が今まで考えなかったことをたくさん学ぶことができ、とてもよい勉強になりました。中でも「不親切グラフ」についての発想は自分が教える立場になったときも活かしていけると思いました。（東京 / ピアノ / １年）

・演劇のワークショップといっても、演技をするのではなく、人との距離を計りながら作業をしていくのはおもしろかったです。
（神戸 / オルガン / １年）

・自分から話しかけていかないとグループができない状況になり、ゲームが成立しなくなるので、コミュニケーションに自信がない私にとってよい練習になったと思います。何か機会があればまたやりたいです。また、選挙に関しては、みんなでアイデアを出し合ったのがおもしろかったです。全てに共通するのは、全然知らない人や友達がどんな人なのかを知ることができて楽しかったです。
（東京 / ピアノ / ４年）

※写真は神戸女学院大学での様子です。

平成 28 年度　第2回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第２回ミュージック・コミュニケーション講座 「音楽を通して社会の役に立つとは」
講　師	仲道 郁代（ピアニスト）
実施日時	2016 年 6 月 3 日（金）14:00 ～ 15:30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部　合奏室
講座の概要	第２回の講座は、第一線のピアニストとして活躍しつつ、音楽の社会的役割を広げる活動にも積極的に取り組んでいるピアニストの仲道郁代氏を講師に迎え、神戸女学院大学から発信した。 講座は、「音楽を通して社会の役に立つとは」と題し、世の中で起こっていることや、これまでの仲道氏の活動と今考えていることについて話された。 まずは、「クラシック音楽にはどんな作用がある？」と学生に問いかけ、世の中で音楽がどのように捉えられているかを確認した。 次に、仲道氏のこれまでの活動の歩みをスライドで紹介した。これは一人のピアニストの歴史であると同時に一女性としての歴史でもあり、ピアニストとして母として常に全力投球で生きてこられた仲道氏の歩みに、学生たちも釘付けになっていた。 また、クラシック音楽のコンサートとアイドル歌手のコンサートにおける音楽のあり方と集客力について考察し、クラシック音楽のコンサートは多様な関係性の上になりたっているが故に難しいと敬遠されがちであるが、人間関係も多様である今の世の中に合っていると話された。 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向け、政府が文化プログラムにも力を入れると言っている今こそ、アンテナを立て、将来何ができるかを考え、学び、卒業した後に実践すれば、文化芸術立国を実現することができるかもしれないと話された。「クラシック音楽にはどんな作用がある？」と常に自問自答しながら活動していくことが、クラシック音楽の発展に繋がると締めくくった仲道氏の言葉は、ステージでの表現者としてのみならず、絶えず音楽の普及と社会での役割の向上を目指して奮闘されている人の発言だけに説得力があり、受講生は自分も一音楽家として何かしなければ、何ができるのだろうと深く考えるきっかけになったはずである。

〈学生のことば〉

・まさに悩んで（考えて）いたことへのお話を伺えて本当によかったです。すぐには考えがまとまらないのですが、非常に前向きになれました。私なりの道も、今後の日本のためにも考えていきたいと思います。嵐のコンサートの例え（矢印の図）はとても理解しやすくて、目からウロコでした。ありがとうございました。　（神戸 / 聴講生）

・仲道先生はプロのピアニストでありながら、幼い子どもたちや音楽に興味をまだ持っていない人たちにも焦点を当てて活動していらっしゃることに、とても関心を持ちました。この講座に参加して、安心したことがあります。それは、プロでも、若い人たちや音楽にあまり興味をもっていない人たちに、どのように音楽の素晴らしさを伝えるかということで悩んでしまうことです。私だけではないと思えることができました。
（神戸 / ミュージック・クリエイション / ２年）

・クラシックとそうではないジャンルの音楽表現者、自分と他人とのベクトルの関係の違いに驚きました。需要との関係だけでなく、クラシックとはどういったものか、クラシックの特徴に基づいて話されていておもしろかったです。札幌でのワークショップもすてきでした。子どもの感性で作り上げるワークショップは、大人も楽しんでいて、音楽に触れるだけでなく、美術やお話を用いて音楽のすばらしさと楽しさを伝えられるのはすごいことだと改めて感じました。

（東京 / ピアノ / １年）

・とてもおもしろかったです。これからの学生生活をどう過ごしていくか、どのように考えていけばいいのか悩んでいたのですが、今回の講義をきっかけに、より具体的に考えていくことができそうです。（神戸 / オルガン / １年）

・実際にどのように音楽ワークショップを行ってきたのかがよくわかった。ワークショップの仕掛け方、何と何を組み合わせることができるのか考えてみたいと思った。“ 言葉の向こう側を想像する、味わう ” という表現がすごく好きだと感じた。自分の立場から、どのようなものが発信できるか、というのを考え続けたいと思う。

（東京 / ピアノ / ４年）

・４年後の東京オリンピックに伴って、芸術活動も促進されるという話を聞いたので、その時にできるであろう大きな流れに乗れるように、これからの大学生活は自分自身の音楽との関わり方としっかり向き合い、できる限りの努力を尽くして毎日を大切に過ごしていきたい。まだ卒業後の進路は分からないが、きちんと自分と向き合う過程で、それをイメージしていければと思う。

（神戸 / ピアノ / １年）

・将来、自分もワークショップなどに携わる可能性があることを考え、やり方を学ぶために何かのワークショップに参加してみたいという思いが沸きました。私は正直、今までクラシックは絶滅しないだろうし、わざわざ広めなくても好きな人だけ聴き続ければよいのではないかと思うことがありました。しかし、今回、クラシックが役に立つことを知り、クラシックを広められるだけの知識を身につけるため深く学んでいきたいと思いました。（東京 / ピアノ / ２年）

・自分のボランティア活動にまず活かしたい。福祉の面で（老人、子ども、障がい者）、今、音楽が必要とされている気がする。実際にそういう場面に出くわすたくさんの可能性を考えたいです。

（東京 / ピアノ / ４年）

※写真は神戸女学院大学での様子です。

平成 28 年度　第3回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 3 回ミュージック・コミュニケーション講座 「インタラクティブ・コンサートの実践：学校クラスコンサート」
講　師	佐藤 展子（ピアニスト・東京音楽大学講師）
実施日時	2016 年 6 月 17 日（金）14:10 ～ 15:30
実施場所	東京音楽大学　A 地下 100 教室
講座の概要	本学卒業生である佐藤展子先生に、ピティナ（全日本ピアノ指導者協会）が東京周辺の小学校で開催している「学校クラスコンサート」についてお話していただき、出演者として何が求められ、どういった点を工夫しているのかを説明していただいた。 学校クラスコンサートは、小学校の音楽室で 1 クラス単位（30 ～ 40 名）の子どもたち（10 歳前後）を前に演奏するもので、奏者の動きや息遣いを間近に感じ、音楽の感動を肌で感じてもらうことを目的としている。出演が決定すると、まず共演者を決定し、選曲を行う。できるだけ多様な音色を聴いてもらうために弦･管･打楽器の人と組むことが多く、そのために、大学時代にソロの曲ばかり弾いていた時には経験しなかった曲に取り組み、レパートリーをどんどん広げていくことになった。演奏曲は長くて 5 ～ 6 分で飽きさせないようにし、緩急をつけ、さらに楽器の特徴を生かしたものとする。コンサートの中で、演奏とトークの割合は 1 ： 1、すなわちトークの割合がかなり大きい。必ず楽器紹介をはさみ、その中に質疑応答を交えて、子どもたちとのコミュニケーションを取るようにしている。子どもたちの興味を引くように、話の内容や言葉遣いには常に注意を要する。許容範囲内で楽器に触れたり共演したりして、体験型のコンサートを目指している。子どもたちの発想は想定をはるかに超えているが、演奏者はそういったやり取りをも楽しむ余裕が必要とされる。また､拍手をしたり静かに聴いたりする｢コンサートのマナー」についても子どもたちに伝えるようにしている。 締めくくりに、演奏家が実社会で求められることとして、以下の 4 つが挙げられた。①ニーズにあったプログラムの企画力　②初見・即興・アレンジの能力　③コミュニケーション力（特にトーク）　④プレゼンテーション能力　学生にとっては、卒業後の活動の可能性を具体的に示される刺激的な講義であった。

〈学生のことば〉

・ワークショップをするにあたって、子どもが飽きない演奏時間、曲のムード、話の内容など、たくさんの時間をかけて考えられていることがよくわかりました。奏者の方の話す時間なども含めてアドリブの部分が沢山あって、大変そうだなと改めて感じました。子どもに音楽に触れてもらいたい、沢山の音楽に出会ってもらいたいという思いから､音楽に触れる方法の工夫や､コンサートマナーなど、色々なことを臨機応変に教えられていて、すごいと思いました。　（東京 / ピアノ / 1 年）

・普通に演奏会を行うのと、子どもたちに向けて演奏会をするのでは、やっぱり工夫の仕方が違うのだなと思いました。トーク力や楽器体験､コンサートのマナーの教え方など、子どもたちとの触れ合いがたくさんあって良いなと思いました。
（東京 / ピアノ / 1 年）

・どのような流れで組み立てられているかが理解できました。ただ楽しんでもらうだけでなく、子どもたちがどう反応しているか、それに対してどう

返しているかを知りました。短時間でしたが、私も楽しませていただきました。子どもたちの反応をみて、教育実習を思い出しました。

（東京 / ピアノ / ４年）

・「インタラクティブ・コンサート」について、今回の講義で沢山のことが分かりました。まず、演奏会を行うにあたって形態や選曲などの内容をしっかり整えなくてはいけないと思いました。そのために、事前の打ち合わせが大切なことがよく分かりました。子どもたちとの接し方について、コミュニケーションの力が大事だと思いました。興味を持ってくれるような話し方、見せ方に工夫することで相手との距離が近くなると思うのでほんの少しの工夫が大切だと思いました。

（東京 / ピアノ / １年）

・前回の講座でも問題となった、気を抜いたら衰退していくクラシック音楽を守っていく対策の１つになるようなお話を聞き、ワクワクさせられました。成長していく子どもたちの心に残る思い出をつくり、音楽を好きになり、大人になっても「あのとき感動した音楽をまた聴きたい」と思ってもらえるようにしようという考えは、これから私たちが何かのコンサートを企画・実行する機会ができたとき、目標としていきたい考え方だと感じました。ただ演奏するだけでは足りないということを、前回に続き痛感させられました。

（神戸 / ピアノ / １年）

・子どもたちはプロの演奏家の演奏を聴く機会がめったにないと思うので、こういうコンサートを開くことは良いことだと感じました。また、一方的なコンサートではなく、子ども達とコミュニケーションを取りながら進めていくことで、音楽を身近に感じてもらえる良い機会になるのではないかと感じました。　（東京 / ピアノ / ４年）

・子どもたちに音楽の楽しさをわかってもらうため、楽しいコンサートにするには、選曲や話し方などを工夫することが大切だと思いました。

（東京 / 作曲芸術 / ４年）

・インタラクティブ・コンサートの実際の映像を見たり、佐藤先生のお話を聞いて、計画を立てて取り組むまで１ヶ月しかかからないことに驚きました。小学生を相手に音楽について話したり、演奏をしたりすることは難しいと思います。小学生が眠くなったり喋ったりしてまとまらない気がしましたが、映像を見て、トークなどをおもしろく工夫していることに関心を持ちました。

（神戸 / ミュージック・クリエイション / ２年）

※写真は東京音楽大学での様子です。

平成 28 年度　第４回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 4 回ミュージック・コミュニケーション講座 「音楽とダンスで会話しながらコミュニケーションを考える」
講　師	砂連尾 理（ダンサー・振付家）
実施日時	2016 年 6 月 24 日（金）14:00-15:30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部　合奏室
講座の概要	第 4 回の講座は、ダンサー・振付家であり、神戸女学院大学音楽学部舞踊専攻の講師である砂連尾理先生をお迎えし、神戸女学院大学から発信した。また、舞踊専攻 4 回生 6 名のサポートを得て行った。講座の冒頭で「音楽とダンスは近い存在である。近代以降、専門性が重要になり、分野が細分化していったが、音楽にもダンスにも通じる身体を作っていこう。」と呼び掛けて、ストレッチが始まった。二人一組になって身体をほぐしていき、雰囲気も和らいだようだった。 まず、ボディー・パーカッションの映像を見てから、実際にボディー・パーカッションを行った。一人目の発した音を聴いて、二人目が音を重ねていくというように、グループでどんどん音を重ねていった。最後には神戸と東京の全員で音を重ねていき、多少のタイム・ラグがあったものの、画面越しでの一体感を感じたようだった。 次に、「文字を声に出して、指で描いてみる」というワークを行った。「あ」という声のニュアンスによって描き方を変えるところから始まり、足で「あいうえお」を表現したり、指以外の身体の色んな部分を使ったりしながら、さらに音のニュアンスを表現していった。 その後、元ロイヤルバレエ団のパフォーマンス映像を見た。「あー」と言いながら声を高いところから低いところまで出し、歩きながら体を上から下に降ろしていくような動作をつけたパフォーマンスで、驚きながら見ている学生もいた。この動作を何回か全員で行い、様々な表現方法を学んでいった。 講座の後半に、砂連尾氏が「今、神戸では雨が降っているが、雨でイメージする音は何？」と学生たちに尋ねた。色々な意見が出た中から、「ぽたぽた」という言葉のイメージによって、身体の動きを変えてみるワークを行った。今までの単音と比べ、さらにイメージを膨らませ、全身を使って表現していった後、先ほどの「ぽたぽた」という言葉を、楽器を用いて表現していった。楽器を持った学生が鳴らす「ぽたぽた」をイメージした音を聴いて、舞踊専攻生が体を動かす。砂連尾氏は「これでは音楽とダンスが分かれたままではないだろうか。」と投げかけ、反対に、舞踊専攻生の奏でる音に合わせて、音楽を専攻する学生が体を動かしたり、神戸の学生全員が音を出し、東京の学生全員が体を動かしたりした。その後は、「動きと音の対話」が始まった。動きと対話するように楽器を鳴らし、それに応じてまた動くというものだ。さきほどのワークより、相手の表現をさらに感じ取ることで、音と動きが一体となっていった。 最後に、全員が一言ずつ述べ、講座の感想をシェアした。砂連尾氏は「ついつい専門的になると、やっていないことに対して恐怖感が生まれる。音楽もダンスも元々は楽しむためのものだったのに、日常から離れた行為になってしまっている。しかし、私たち自身の身体で楽しむことができると、敷居が少し下がる。そのようにして、専門的にやっていることが色んな人の役に立ったら嬉しい。」と締め括った。

〈学生のことば〉

・舞踊専攻の先輩たちと初めて同じ授業に参加して、改めてすごいと感心しました。体の全ての部分を使い、音や雨の雰囲気や音ではない声を表して、遠く離れた東京音大の学生ともつながるということは簡単ではないと思います。音を発する側の私たちにおいても、相手と言葉や合図もなしでお互い仕掛けたりすることは日々減ってきていることなので、新鮮でとても楽しかったです。
（神戸 / ミュージック・クリエイション / ２年）

・私は教職を取りたいと考えています。音楽とダンスを通じてコミュニケーションをとるのはとてもおもしろい形だと感じたので、もし私が教師になったらうまく応用してみたいと思いました。また、音を感じたまま自由に自分の体を動かすという表現は、これからの私の音楽をより有意義なものにできると思いました。（神戸 / ピアノ / １年）

・私は音楽を作り出す側の人間です。私の説明なしでダンサーが想像し、お互いに求めるものを与え合えるような関係を作り、さらに第三者の人に伝えられるようにしていきたいです。決められた台本に縛られず、その場の空気を読み取り、常に新鮮なセッションを試みようと思いました。
（神戸 / ミュージック・クリエイション / ２年）

・私はこの講座を受けるまで、ダンスがこんなにも音楽と関わりがあるとは思いませんでした。しかし、体が固まっていては音楽も止まってしまい、表現もできません。色々な方法で体を自由に動かせるようになれば、今までより多くの表現ができ、音楽とダンスでコミュニケーションがとれるのだと思いました。一つの音や言葉でも、人によって感じ方、受け取り方が変わり、とてもおもしろく音楽と似ているなと感じました。
（東京 / ピアノ / １年）

・普段から体を動かしていきたいなと思いました。表現したくても恥ずかしくて表現できない子どもは沢山いると思うので、将来そのような子どもを手助けできる活動ができればいいなと思いました。（東京 / ピアノ / ２年）

・これからの音楽の表現にダンスも取り入れたいと思います。ワークショップなどを行う際にも、音楽だけではなく、体全体を使ったダンス、一部分だけを使ったダンスを取り入れると、想像力が広がりコミュニケーションも取りやすくなり、とてもよいのではないかと思いました。今後たくさんのことに活かしていきたいです。本日はありがとうございました。（東京 / ピアノ / １年）

※写真は神戸女学院大学での様子です。

平成 28 年度　第５回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第５回ミュージック・コミュニケーション講座 「エル・システマジャパンが実践する音楽教育のイノベーション」
講　師	浅岡 洋平（チェロ奏者・指揮者・音楽監督）
実施日時	2016 年 10 月 7 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学　A 地下 100 教室
講座の概要	浅岡先生は、東京藝術大学からジュリアード音楽院に進んでチェロを学ぶ中で、チェロの演奏だけに関心を限定することなく、リトミックや指揮などに幅広く視野を広げてこられた。その原動力は、ジュニア・オーケストラの時に感じた楽しさであり、そうした音楽の力を拡散することが大学院修了後の方向性と結びついているようだ。 講義では、2001 年に設立した音楽教育・啓蒙活動団体 Hands on Classic と、2013 年に開始したエル・システマジャパンの音楽監督としての活動が紹介された。 Hands on Classic は、わかりやすく音楽を提供する「エデュケーション・コンサート」を核として音楽制作を行っている。メディア・アートによるデジタル舞台「魔笛 MATEKI」では、舞台の背景に代わって字幕入りの映像が映し出され、歌手は舞台上や客席の近くで自由に動きながら歌うという演出がなされている。また「クラシック・ワールド」「リトル・クラシック」というコンサート・シリーズでは、やはり映像やアニメーションをスクリーンに映し出すと同時に、トークを盛り込み、五感を通して音楽に親しんでもらうことを目指している。 エル・システマジャパンが福島県相馬市で実践している「相馬プロジェクト」は、相馬市との連携により、弦楽器を子どもたちに一から指導し、次第にオーケストラ演奏の楽しさを体験させていくものである。浅岡先生が相馬で指導するのは週末だけで、その他に地元の弦楽器指導者が週 1 ～ 2 回指導するシステムとなっている。すでにまる 3 年間の実績があるため、初心者として始めた子どもたちもかなり弾けるようになって、最近ではベートーヴェン、ドヴォルザーク、ホルストなどの作品に取り組み、また 2016 年 3 月のベルリン公演ではベルリン・フィルのメンバーと共演する機会も得た。子どもたちは、こうした経験をとおして音楽が好きになり、また自信を得ている。同時に保護者たちにも音楽経験が身近なものとして浸透している。 浅岡先生のお話は刺激的で、また講義で使われたパワーポイントはデザイン性に満ちていた。これからの音楽活動にアートや映像などの視覚的要素を「シンクロ」させることの重要性が、講義そのものからもよく伝わってきた。

〈学生のことば〉

・もっとサービス精神のあるコンサートをホールでやれば、クラシックに興味を持つ人が増えると思う。（東京 / ピアノ / 1 年）

・たくさんの人が音楽に親しみを持てるように、映像やデジタル機器を使用して、色々な音楽を伝えていくことは素晴らしいと思いました。自分がもし、コンサートを開くときは、誰に対して、またコンサートを開く目的をはっきりさせることがとても大切だと感じました。お客さんをどう楽しませるか、どう音楽の中身に興味を持ってもらうかを意識したいと思いました。（東京 / ピアノ / 1 年）

・音楽を幅広く広げようとしていて、すごいなと思いました。たくさんの色々な発想力でクラシック

音楽を広げているのだなと思いました。音楽のイメージを映像にしたのが面白かったです。
（東京 / ピアノ / １年）

・高校の頃、３年間を通して自分のやりたいことを研究するという課題があり、クラシックを普及させるという目的でレクチャーコンサートを作るということをしたことがあるのですが、その時にぶつかった壁に対する答えがたくさんあった気がします。分かる人に分かればいい、という演奏家自身の姿勢がクラシックの普及率の低さにつながってしまっているのかなと感じました。
（東京 / ピアノ / ２年）

・クラシックを多くの人に好きになってもらうため、知ってもらうために、様々なアイディアを取り入れる活動をしているハンズオンの事業を知ることができて、とても楽しかったです。コンサートを企画する上で重要なことは演奏だけではなく、マーケティングなり目的なり、それらを通して音楽の中身、内容を伝えることが重要だという信念をプレゼンから感じ取ることができて大変有意義な時間が過ごせました。（東京 / ピアノ / ３年）

・クラシックファンが人口の 0.1％しかいない状態から多くのクラシックファンを増やそうという取り組みをプレゼンして頂き、とても興味深かった。全くクラシックに触れたことのない人に音楽だけを聴かせても受け入れにくい現状なので、絵、アートや色々な工夫をした演奏会を企画したり、良いものを提供することでリピーターが生まれ、次につながっていく。イベントで音楽に関わることと、教育として音楽に関わることとは全く違う。
（東京 / ピアノ / ３年）

・浅岡先生がお話してくださった演奏の取り組み方・進め方は、アウトリーチで行っている病院・幼稚園などでの演奏と似ている感じがしました。また、とても良い内容だったので、今からでも参考にしたいです。
（神戸 / ミュージック・クリエイション / ４年）

・まさに私たちが必要になるであろうものを着実に作っているのだと感じました。「デジタル世代」である今の世代に合った新しい内容をたくさん考え、実現されている浅岡さんのすごさに感心しました。家族を対象にしたイベントは多くのアーティストが行っていますが、その理由である「アートへの架け橋」についての説明が分かりやすく、納得しやすかったです。communication をとるためには、education、promotion といった目的をしっかりと持ち、取り組むことが大切なのだと感じました。また、お客さんにしんどい思いをさせず、楽しく快適な時間を提供することや、ただ有名な人を使うのではなく、良い内容を提供することでリピーターをつくるということも、すごくしっくりきました。（神戸 / ピアノ / １年）

・音楽をどう人に届けるか―その根本的な課題に、かなり具体的な様々な方法で取り組まれてきたこと、イベントとして多数の人へのアプローチの仕方、その一方でエル・システマのように個々にアプローチすることでの音楽効果について、とても分かりやすく、先生の思いを交えながらお話いただいて、とても勉強になりました。もっとディスカッションしたかったので、神戸女学院で直接学生に講義していただきたいと思います。
（神戸 / 聴講生）

※写真は東京音楽大学での様子です。

平成 28 年度　第6回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 6 回ミュージック・コミュニケーション講座 「7 月の音楽ワークショップと 9 月の特別セミナーの実施報告」
発表者	東京音楽大学 学生
実施日時	2016 年 10 月 28 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学　A 地下 100 教室
講座の概要	東京音楽大学の今年度の実践から、7 月 29 日に区民ひろば南池袋で実施した音楽ワークショップと、9 月 16 ～ 18 日に実施した特別セミナーについて学生が発表した。 7 月の音楽ワークショップは「みないけキッズアーティスト」というシリーズ名で年 2 回実施しているもので、「扉を開けたら世界旅行！」というタイトルの下に、世界各地でさまざまなダンスを楽しむという内容である。参加した小学生は 27 名、これを率いるワークショップリーダーが 6 名、サポートに 7 名という態勢であった。世界旅行とは銘打ったが実際には日本・ハワイ・ブラジルの 3 地点に絞り、それぞれソーラン節、フラダンス、サンバのリズムに合わせて体を動かす内容であった。「振り」や歌の創作を交えて子どもたちの自発性を促す場面も挿入したが、ダンスで高揚した勢いが止まらず、初めてリードする学生にとっては、全体をよくコントロールして一人ひとりと丁寧にコンタクトをとりながら創り上げていくことの難しさを感ずる機会となった。 特別セミナーは、学外の会場を借りて 3 日間開催され、ワークショップの考え方や即興の方法などについて学んだ後、最終日に子どもを集めてワークショップ実習を行った。今回のテーマは『富嶽三十六景』の浮世絵からヒントを得た創作で、絵のどこに創作のヒントを見出していくのかを充分実体験したのちに、同様の課題に子どもたちと取り組んだ。前述の 7 月のワークショップを体験したせいか、アイスブレイクで心を開いていく様子や子どもたちとの関わり方には格段の進歩が見られた。この体験で音楽やワークショップに対する考え方が大きく変化した学生も多い。 そうした意味で 7 月と 9 月の実践は東京音楽大学の学生たちにとって大きな意味を持つものであったが、今回の中継では機器の不具合のために鮮明な画像・映像を送ることができず、音声のみではその熱気を充分に伝えることができなかったと思われるのが残念である。

〈学生のことば〉

・音楽で世界旅行するという発想は面白いと思いました。音楽の「授業」ではないので、“音楽の楽しさ”“ふれあい”を大切にしながら行うことは難しいように思えました。対象者へのアプローチの工夫の重要性も見えました。　（東京 / ピアノ / 2 年）

・神戸女学院とのビデオ通話によるワークショップのスライドとプレゼンテーションは、先輩達が先週事前にプレゼンしてくださっていたものでしたが、また更にわかりやすく楽しいプレゼンでした。（東京 / ピアノ / 3 年）

・本日のプレゼンを拝聴し、思ったことはワークショップの難しさです。今までの講座で、ワークショップの素晴らしさや面白さを学びました。ワークショップを受ける側は、リーダーの進行の下、参加しますが、ワークショップリーダーは自らが集団をリードしなければなりません。特に参加者が子どもである場合、進行自体が難しい場合もあると思います。ワークショップで伝えたい事を伝えるにはまず子どもたちへの対応力がワークショップリーダーに求められていると思いました。（東京 / ピアノ / 3 年）

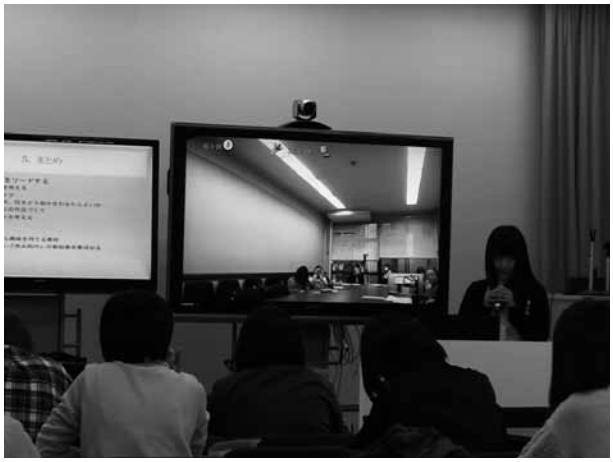
・今日プレゼンして下さった方々は、実際にワークショップリーダーを経験されて、良かった点や反省点をおっしゃってくださってリーダーに求められる事を理解できました。また、進行には予定通りに進まないことがあり、それに臨機応変に対応できる大切さを学べました。
（東京 / ピアノ / ３年）

・みないけキッズアーティストについては、子どもを相手にどのように進めるのか、どのように進めていけば意味のある「音楽」ワークショップになるのかをとても考えさせられた。ただ、「子どもだから」という点で、やさしくしたり、これはできないだろうといった考えを持たないことが重要だと知った。特別セミナーについては、感覚を図に表す→通常の WS においても利用できる（思いを共有できる）、自由な部分を残すことによって新しいものを生み出すことができることを学んだ。
（東京 / ピアノ / ３年）

・夏休み中のそれぞれの活動の内容や子どもたちの様子がよく分かった。一言でワークショップといっても色々なものがあるのだと知った。同じアイスブレイクでも声かけの仕方次第で全く違うものになる様子に驚いた。
（東京 / ピアノ / ４年）

・小さい子どもたちは元気だけど、言うことがすぐ聞けないのは大変だと思いました。「静かにして」という言葉を使わずに集中させることを意識したのに、とても感心しました。ブラジルのサンバを使ったのは、老若男女を問わず盛り上がると思うので、大変よかったと思います。それを用いたことは大変良かったと思います。絵を見て、「山」と「空」のグループで話し合う企画が楽しそうだと思いました。
（神戸 / ミュージック・クリエイション / ２年）

・大学に入学してから、このような発表を初めて聞いたのですが、基本は変わらないことに安心しました。「みないけ」のようなイベントを作っていく過程を初めて知ることができ、とても刺激的でした。きっと女学院でもアウトリーチを履修すれば経験できるのかもしれませんが、私には新鮮であり、３回生になったときの参考にしたいと思いました。また､同回生が私よりもしっかりと考え、意見を述べていたことに驚かされたので、私ももう少ししっかりと頑張り、臨もうと思いました。
（神戸 / ピアノ / １年）



※写真は東京音楽大学での様子です。

平成 28 年度　第７回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第７回ミュージック・コミュニケーション講座 実習報告会（神戸女学院大学）
発表者	神戸女学院大学 学生
実施日時	2016 年 11 月 18 日（金）14：00 ～ 15：30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 合奏室
講座の概要	2016 年 9 月 20 日～ 24 日に神戸女学院大学で実施した音楽ワークショップ特別研修（24 ～ 27 頁参照）について、この研修に参加した本学の履修生を中心に発表を行った。 パワーポイントを使って、５日間の研修について各日の時間配分と大まかな流れを紹介した。その中で、「最終日の曲作りの過程」「作品発表会」「反省会」については、映像を流して実態を見てもらう時間を設けた。また、最終日に子どもたちと行ったアイスブレイクを再演して、東京音大の受講生たちにもＴＶ越しに体験してもらった。 東京音大からは、「子どもの意見がどこまでなのか？」「楽器の選び方は？」「コード進行はどうしたのか？」など曲作りの過程に関する質問が多数出た。神戸女学院の学生は、伝えることの難しさ、日本語がうまく使えないと話していた。最後には、最終日に東京から来てくださった武石先生から、「責任を持ってリーディングするには、個を持ち上げつつ全体の進行をも優先するさじ加減が大事である」とアドバイスを頂いた。

〈学生のことば〉

・様々な質問を頂いて、自分たちだけでは伝えることのできなかったことを引き出してくれた。次にこのような機会があれば、その点にも注意して準備をしたい。
（神戸 / ミュージック・クリエイション / ４年）

・ワークショップで、付箋を使って皆の考えを共有するアイディアはすばらしいと感じました。アイスブレイクは子どもたちによっては不思議な動きと捉える子もいるので、なぜ何のためにアイスブレイクをするのかアドバイスをして理解を得ることは大切なことだと思いました。円になって子どもたちと話し合い、体を動かしながら１つの作品を作っていくのは、子どもとの人間的交流が深まり、コミュニケーションも増えてとてもよいと思いました。（東京 / ピアノ / １年）

・このワークショップに参加して、たくさんの先輩と少し深く関われたのは大きな財産です。私自身はまだまだ未熟ですが、見たものや一緒に過ごした時間からよいところをしっかり盗んで、自分のものにしたいです。ありがとうございました。
（神戸 / ピアノ / １年）

※写真は神戸女学院大学での様子です。

平成 28 年度　第８回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第８回ミュージック・コミュニケーション講座 「インタラクティブ・コンサート実施報告と相馬プロジェクト参加報告」
発表者	東京音楽大学学生　神戸女学院大学学生
実施日時	2016 年 12 月 9 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学　A 地下 100 教室
講座の概要	東京音楽大学の今年度の実践から、7 月に行ったインタラクティブ･コンサート、および 8 月に行った相馬プロジェクトにおけるワークショップについて報告した。 インタラクティブ･コンサートは「星空ワンダーランド」というタイトルにより、子ども・ファミリー層をターゲットとして南大塚ホールで開催したもの。コンサート全体の企画は東京音楽大学アクト・プロジェクトの学生が行い、コンサートの前半部分はトークを交えたインタラクティブ・コンサート、後半部分はサンドアートの映像をスクリーンに映し出しての演奏という構成であった。トークの部分では聴衆に意見をきいたり、楽器紹介をしたり、トーンチャイムを使って楽曲の一部に参加してもらうということを試みた。聴衆を表面的に喜ばせるのではなく、音楽のさまざまな側面を体感してもらうことについての学生たちの初めての挑戦であった。 「相馬プロジェクト」とは、10 月に講師として講義をしていただいた浅岡洋平先生が音楽監督を務めておられる子どもオーケストラと合唱団である。今回、このプロジェクトの夏の講習会の中で時間をいただき、東京音楽大学から 4 名、神戸女学院大学から 2 名がリーダーとして参加し、ワークショップを行った。ふだん隣に座らない限り深い関わりをもたないままの子どもたちどうしや、どうしても上下関係になりがちな指導者と子どもを「アイスブレイク」し、音楽の楽しさ・おもしろさを感じてもらうことをねらいとする試みである。グループに分かれてのプチ創作や「アヴェ･ヴェルム･コルプス」の旋律を変形した旋律によるボディーパーカッション等を交えて、150 名に及ぶ大人数のワークショップをリードした。教員・助手・大学院生・学部生の組み合わせでワークショップをデザインするという意味でも、貴重な機会であった。

〈学生のことば〉

・客席の方達もすごく楽しんでいる様子が伝わってきた。〈月の光〉がトーンチャイムなどでとても雰囲気が出ていて素敵だなと思いました。打ち合わせをしっかりやることも大事だと思った。ルール決めも大切。色々な引き出しを“持つことも大切だ”と思いました。　（東京 / ピアノ / 1 年）

・司会者の進行がとてもスムーズで子どもたちを釘付けにするように楽しそうに進行していた姿が素敵だと思いました。ハーモニーの美しさを楽器体験によって一人一人が実感できていたことがとても良いアイディアだと感じました。
（東京 / ピアノ / 1 年）

・小さな子どものコンサートはもっと騒ぐというイメージがあったので、配布資料にも書いてありますが、実際には言うことを聞いてくれることが多かったと聞いて、そうなんだなと思いました。また、トーンチャイムを使用して、使用していない人は歌で参加するという方法は良い考えだなと思いました。　（東京 / ピアノ / 1 年）

・プレゼンテーションが分かりやすかったです。本番の流れの良さがあるのは準備段階での目的、そのほか計画のシェアがしっかりできていることが大切なんだなと２つの企画のプレゼンテーションを見て感じました。　（東京 / ピアノ / ２年）

・「星空ワンダーランド」ワークショップのプレゼンテーション。夏らしいタイトルと曲目がとても良いなと思いました。レジュメでは大成功したんだと思いました。実際のワークショップの映像は楽しそうに子どもたちがワークショップに参加しているなぁと思いました。司会進行の方が楽しそうに司会をしていたので、講座に楽しく参加できているのだなと思いました。案を考えたり、話し合ったり、成功させるまでとても大変なことだと思いますが、得られるものが大きいなと感じました。また「福島県相馬市でのワークショップ」はとても大人数のワークショップで、もともと弦楽器オケで集まっている子どもがこのワークショップを通して友達になり、さらに深い音楽が作れそうなワークショップだと思いました。手を挙げて「静かに！」の合図は言葉でいうよりも効果的で良いなと思いました。曲の替え歌もよく、リズムもメロディーも素敵で、楽しそうなワークショップでした。　（東京 / ピアノ / ３年）

・多くの人の参加するワークショップでは、人を引き込むパワーが必要だと思いました。私も身につけたいです。　（東京 / 作曲芸術 / ４年）

・エル・システマジャパンは自分も行ってみたいと思っていたので、報告を聞けてよかった。動画を見たところ、とても充実した内容の音楽ができあがっていて驚きました。やはり普段から音楽をきたえているということは、無意識のうちに感性を育てているのだなぁと思いました。
(神戸 / ピアノ / １年)

・司会がどのような雰囲気で進めるか、というのも理解度に関わるのだなと思った。静かにする合図など、全体を動かすためのコマンドを決める、という発想がすごいと思った。
（神戸 / オルガン / １年）

・（相馬プロジェクト）これまでのワークショップを学び、ボディー・パーカッションや歌詞を作るという企画は、１つになって仲良くなりやすいものだと思いました。「静かにしてください」と言わず手を使うことは良いアイディアだと思います。
（神戸 / ミュージック・クリエイション / ２年）

・途中からしか参加できませんでした。あんな大人数でワークショップすると大変そうだけど、それに比例してたくさんのことが身に付くと思います。
（神戸 / ミュージック・クリエイション / ４年）

※写真は東京音楽大学での様子です。

平成 28 年度　第9回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第９回ミュージック・コミュニケーション講座 総括
発表者	各大学担当者：武石 みどり（東京音楽大学）、津上 智実（神戸女学院大学）
実施日時	2017 年 1 月 20 日（金）14：00 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学 A 館地下 100 教室、神戸女学院大学音楽学部会議室
講座の概要	今年度最後の第９回講座では、まず東京音楽大学での「夏期セミナー」について映像を使っての振り返りが行われ、画面を挟んで両大学間で活発な質疑応答が行われた。とりわけ保護者をワークショップに巻き込むことの意義と可能性について熱心な話し合いがなされた。 次に、シニア向けのインタラクティブ・コンサート（2 月 22 日開催予定）の準備をしている東京音楽大学のグループが味見体験のプロモーションを披露した。「フランス音楽フルコース」と題して、前菜からメイン、そしてデザートまでという形で、ドビュッシーやラヴェルからシャンソン〈オーシャンゼリゼ〉までを含む７曲を組むというおしゃれなプログラムである。具体的にはドビュッシー〈月の光〉等の鑑賞から〈ゴリウォークのケークウォーク〉による身体表現までを含むプログラムについて、まず口頭での説明があり、一部、実演によるデモンストレーションが行われた。スープ相当のドビュッシー〈ゴリウォークのケークウォーク〉を使った身体表現ワークでは、リズムに合わせて両手を頭、肩、膝にもっていき、デザート相当のピアノ連弾によるラヴェル〈ボレロ〉では、３つの素材（メロディー、小太鼓のリズム、低音楽器群のリズム）を説明した上で、参加者にリズム打ち等で参加してもらうという形で披露された。 これを受けて、両大学間で質疑応答とディスカッションを行った。「シニア向け」とはどういった場の、どういった人々なのかという質問に対して、市民クラブという場に自主的に集まってくる人々なので非常に元気なシニアであるとの追加説明があった。年配の参加者に対する話しの仕方として、教室風に「～して下さい」と指示するよりも、「よかったら～して下さい」とか「～しましょう」といった誘う形にした方がいいのではないかという意見も出された。さらに取り上げる曲の構造をうまく掴ませるワークに高める可能性も指摘された。リーディングの練習が必要で、うまくリードするためにはプロセスをシンプルにして作っていく必要があるとのアドヴァイスもなされた。また、ワークをお客さんと一緒に楽しむ時間を持つことの大切さについても語られた。 神戸女学院側の参加者が非常に少ないという問題があったが、連携ルームのスタッフたちも積極的に議論に参加してくれたのは望外の喜びだった。 最後に１年のまとめとして、神戸側からは、１）前期にピアニストや演劇人、ダンサーなど、いろんな分野の方に来て頂いて、それぞれのアーティスティックなスキルを通じたコミュニケーションについてお話やワーク的なものを含みながら授業をして頂いたこと、２）夏休みの間に双方の大学でワークショップの学びの場を持つことができて、参加者がそれぞれの関心に応じて深く学び取ることができたこと、３）今年初めての試みとしてエル・システマに関わって相馬での活動に参加できたこと、４）このように音楽を介して社会に関わるルートを考える、開拓の努力をするということが動き出しているのを実感したこと、５）来年に向けてさらに息長く発展していくことができればという願い、以上５点が述べられた。 東京側からは、１）３大学連携がスタートした初期にはジュリアードからのティーチング・アーティストやギルドホールのリーダーたちのワークを見るだけだったが、次第に自分たちでインタラクティブ・コンサートやワークショップを独自の形で実践できるようになってきたのは嬉しいこと、２）国立音楽大学でも大学院でインタラクティブ・コンサートを行うコースを新設したので、そこで何をしているのかを学ぶ機会を持つことができればという希望、３）学生たちにはこうした活動を実現できるだけの実力をつけてほしいという要望が述べられて、一年間の講座を締め括った。

〈学生のことば〉

・小さな子どもや保護者を引きつけて楽しませるためには、アクティビティを提案する側が大きな手振りでやる気に満ちた表情をして進行することが大切だと感じました。　（東京 / ピアノ / １年）

・保護者の参加でよりよいワークショップになっているように思えた。曲の特徴をワークを通して上手に伝えようとしているなと感じた。
（東京 / ピアノ / ２年）

・周りの人（保護者）も取り込んで作品を作っていたので、とても楽しそうだった。巻き込めば巻き込んだで、盛り上がることがわかり勉強になりました。　（東京 / 声楽 / １年）

・「親もやりたい」という意見は驚きだったので何かの機会があったら取り入れようと思いました。
（東京 / 音楽教育 / １年）

・今日の授業でやったコンサートは、動きも簡単なもので、みんなでできると思うのでよかったと思います。手拍子なども、どこでどう入れるかのサインはしっかりやらないと動揺してしまうのかなと勉強になりました。話し手の聞き手に対する話し方には「～します」ではなく「～してみませんか」という柔らかい雰囲気も大切だとわかりました。　（東京 / 声楽 / １年）

・語尾など、対象者の年齢によって話し方を考えたいです。　（東京 / 作曲芸術 / ４年）

・自分でコンサートの企画案を考えている中で、演奏会をする側が 100 パーセントの準備をするのは当然だが、それ以上のものが必要だと思った。ちょっと曖昧な表現だと全員には伝わらないと実感した。　（東京 / ピアノ / ２年）

・準備の手順や企画するということを初めて細かく知り、勉強になりました。参考にしたいです。
（東京 / ピアノ / ３年）

・自分の中の音楽の形が少し変わったと思う。音楽は一方通行だけでなく、演奏者と聴衆の意思疎通が最も重要だと思った。子どももシニアも「あなどれない！」ということは、ずっと心に留めておくべきだと思った。
（神戸 / ミュージック・クリエイション / ４年）

※写真は東京音楽大学での様子です。

音楽ワークショップ みないけキッズアーティスト「扉を開けたら世界旅行！」

平成 28 年度　実習報告（東京音楽大学）

事業名称	みないけキッズアーティスト「扉を開けたら世界旅行！」
実施日時	2016 年 7 月 29 日（金）13:30 ～ 15:00
実施場所	区民ひろば南池袋
共催	東京音楽大学 連携センター、区民ひろば南池袋
対象	豊島区在住・在学の小学生（参加者数 31 名）

〈事業概要〉

夏休み中の小学生を対象に、学生が中心となって世界旅行を題材にしたワークショップを創作し、実施した。今回参加した学生は、大半が 4 月からワークショップを学び始めたばかりのメンバーであり、毎週の授業内で、導入（アイスブレイク）に用いるボディーパーカッションやソーシャルゲーム、リーディングの方法について繰り返し実践練習を重ねてきている。このワークショップが授業内での学びを活かす最初の機会となった。

＊導入（アイスブレイク）

・身体ほぐし（リーダーの真似をする）

・リズムアンサンブル（コール･アンド･レスポンス）

＊日本

ソーラン節を題材に、踊りのグループと楽器を演奏するチームに分かれてワークを行った。踊りのグループは 2 列を作り向かい合って、花一匁のようにお互いが前に進んだり、下がったりと、応答するフレーズを繰り返し踊った。楽器のグループは、主に太鼓系の打楽器を使用し、踊りの音楽に合わせて、お囃子のようなリズムを創作した。

＊ハワイ

「アロハ・オエ」の音楽を用い、フラダンスの基本動作を教えたのち全員で円になって踊る。曲中にソロの部分を設け、誰か一人が即興で動作を付けたものを他の全員が真似ることとし、最初は学生が例を示しながら、次第に子どもたちがリードするシーンを組み込んだ。

＊ブラジル

ブラジルのサンバのリズムを活かした振り付けを事前に考え、子どもたちにレクチャーし、一緒に踊る。かなり激しい動きであるが、さらに途中で子どもたちが自由に動き回れる時間を設けて、心身共に解放させる時間を作った。

＊エンディング

輪唱できる簡単なメロディーを教え、並行して世界旅行に関係する 3 字・ 4 字の言葉を考えさせて、それを歌詞にして歌う。次に､そこに｢日本･ハワイ･ブラジル｣の 3 語を当てはめ、ずらして歌うことで輪唱にした。最終的には歌にボディー・パーカッションも加え、ワークショップで取り上げた国を復習する形でワークショップを終了した。

ワークショップの様子

東京音楽大学ミュージック・コミュニケーション講座特別セミナー

平成 28 年度　実習報告（東京音楽大学）

事業名称	ミュージック・コミュニケーション講座　特別セミナー
講師	デッタ・ダンフォード　ナターシャ・ジエラジンスキ
企画	武石 みどり（東京音楽大学教授）
実施日時・期間	2016 年 9 月 16 日（金）17:30 ～ 20:00 9 月 17 日（土）17:30 ～ 20:00 9 月 18 日（日）10:00 ～ 17:00
実施場所	雑司が谷地域文化創造館　区民ひろば南池袋
参加費	東京音楽大学生、ミュージック・コミュニケー ション講座受講生・既習生は無料 一般の参加者（上記以外）: 全日参加 :5.000 円
主催・協力など	主催 : 東京音楽大学 協力 : 英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校、神戸女学院大学音楽学部
参加者数	東京音楽大学生 7 名 一般参加者 7 名 最終日ワークショップ参加者：子ども 11 名（保護者 10 名）

〈事業概要〉

ギルドホール音楽演劇学校よりワークショップ指導者としてコンビを組んで活躍しているデッタ・ダンフォード氏（フルート）とナターシャ・ジエラジンスキ氏（チェロ）を講師に迎えて、3 日間に渡って音楽ワークショップの基礎的なスキルを学び、最終日には子どもたちを招いてワークショップを実践した。履修学生は普段の授業内でアイスブレイクや簡単な即興演奏の経験があるため、例年よりもレベルの高い状態からのスタートとなった。

今回の講座では、葛飾北斎の『富嶽三十六景』を素材として、音楽創作に取り組んだ。これは、素材の選定において「子どもが好きそうなもの」を選ぶのではなく、リーダーが本当にクォリティと興味を感じているものを選ぶべきであること、また子どもたちにもそのおもしろさを感じる感性があると信じるべきだという講師のポリシーに基づいての選択である。

1 日目：導入（アイスブレイク）

クリエイティブな発想を生むための身体ほぐしに始まり、拍子を用いたリズムゲームや声を用いたサウンドスケープを行った。サウンドスケープとは、参加者それぞれが自由に一定の音を歌い、音程が幾重にも重なっていくもので、お互いに歌っている音高の違いをよく聴きながら、最終的なゴールとして全員の音がユニゾンへと集結していくという課題が課せられた。楽譜では書き起こすことのできない複雑なプロセスを経て、音響が変化し集束していくプロセスは、学生たちの日常にはない経験であり、グループの一体感を感じさせるものでもあった。この日のテーマ「相手を知る､聴く」にふさわしく、聴くことを起点として複数の人数で音を探り生み出していくというクリエイティブな時間となった。

2 日目：素材を考える―葛飾北斎の富嶽三十六景

導入アイスブレイクでは、1 日目よりも一段階レベルを上げて、学生にリードを任せる場面が多く設けられた。ワークショップを一度なりとも経験した学生や、すでにワークショップ・リーダーとして何年か経験を積んでいる一般参加者にとっては、講師からリーディングについてアドヴァイスを受ける良い機会となった。

2 日目は主に、翌日に子どもを招いて行うワークショップの準備を行った。『富嶽三十六景』の中から「凱風快晴」の図を選び、そこに描かれた「空」と「山」をキーワードにして、グループに分かれて創作活動を行った。具体的には、それぞれのグループで、絵の中に描かれている空の特徴、山の特徴を言葉にして挙げ、それをどのように音楽で

表現することができるかを考えた。グループワークの後に出来上った音楽を演奏し、どのようなコンセプトがどのような表現に結びついているかをグループどうしで指摘し合った。「空」と「山」の2グループが楽器で音楽を創作したのに対して、グループワークと並行して講師2人は「風」をあらわす歌を創作し、最後に「空」「山」「風」の三つの音楽をどのようにつなげるかを検討して、一つにつながった作品として演奏した。

3日目：子どもを招いてのワークショップ

地域の子どもたちを招いてのワークショップ実践にあたって、午前中はワークショップの全体構成を確認し、どの部分で誰がリードするかを決定した。今回は多くの部分を講座参加者（学生と一般参加者）がリードすることとなった。

ワークショップでは、最初にアイスブレイクを行い、子どもたちの緊張を解き、音楽を楽しむモードへと導く。次に、前日創作した「凱風快晴」の音楽を聴いてもらい、スクリーンに映し出した絵の中の特徴と音楽とのつながりについての問いを投げかけて、子どもたちに気づきを促す。そこから子どもたちを3グループに分けて、各グループに2枚の絵を渡し、創作を行う。さまざまな問いかけと会話の中から、子どもたちに絵の中に見られる特徴を挙げてもらい、またそれを音楽表現に結びつける手助けをしながら、各グループでそれぞれ個性豊かな音楽を創り出した。グループワークが順調に進み講師の手が空いたため、別室で待機していた保護者の方々にも急遽音楽づくりに参加してもらうこととなり、ボディーパーカッションによる創作が加わった。最後に三つのグループの発表に、サプライズとして保護者グループの発表がつながり、全体として、一つの大きな作品ができあがった。今回は偶然にも保護者の方にも創作活動に参加していただくこととなり、多様な年齢層で音楽づくりの体験を共有する新鮮な機会となった。

今回の講師の指導では、1. 自分の考え・感覚を大事にする、2. 小グループの中で一致点を見出し、創作する、3. 全体を見る視点でバランスを取る、の3つの観点を意識することが強調された。今後ワークショップを行っていく上で大変有益な指針を示していただいたことに感謝したい。

〈参加者の声〉

・初めてワークショップの特別セミナーに参加しました。授業でもアイスブレイクや即興演奏を経験していましたが、リーダーの雰囲気によって引き出される音楽が違ってくるのがとても興味深かった。最終日には時系列に振り返りをして、学んだ内容もしっかり整理することができた。
（ピアノ／4年）

・3日目の子どもたちとのワークショップは時間との戦いもあったが、学んだことを生かして、夏のワークショップの時よりも少し、リードができた気がする。ワークショップをリードする上で大切な視点を具体的に先生に教えていただけたので、次回ワークショップをする機会があれば積極的に取り込んでいきたいと思った。
（ピアノ／4年）

・数年前にデッタ、ナターシャの講習を受けさせて頂いたことがあったが、今回も素晴らしいクリエイティビティに感動した。今回素材にした葛飾北斎も子ども達の反応がどうかと思ったが、それぞれの場面で楽しそうに創作していたのでよかった。また機会があれば、セミナーに参加させていただけたらと思います。（一般参加者）

・たくさんのことを学ばせていただきました。自分が今までに培ってきた方法と全く違い、少し動揺しましたが、リーダーが温かく受け入れてくれたので安心して学ぶことができました。特に、相手を聴きながら取り組むワークには次になにが起こるかわからないわくわく感がとてもよかったです。自分のフィールドに戻り、なにか出来ることがあれば実践していきます。ありがとうございました。（一般参加者）

セミナーの様子

「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに 第７回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」

平成 28 年度　実習報告（神戸女学院大学）

事業名称	「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに 第 7 回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」
音楽作り指導者	ナターシャ・ジエラジンスキ、デッタ・ダンフォード、東 瑛子 （英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校のリーダーシップ修士課程修了生）
企画・司会	津上　智実（神戸女学院大学音楽学部教授）
実施日時・期間	2016 年 9 月 20 日（火）14：00 ～ 16：00　9 月 21 日（水）9：00 ～ 12：00 9 月 22 日（木）10：00 ～ 17：00　9 月 23 日（金）17：15 ～ 19：00 9 月 24 日（土）9：00 ～ 18：00 ※「子どものための音楽作りワークショップ」は最終日のみ
実施場所	神戸女学院大学音楽館ホール
参加費	神戸女学院生、ミュージック・コミュニケー ション講座受講生・既習生（卒業生含む）は無料 一般の参加者（上記以外）: 全日参加 :5.000 円 24 日子ども参加 : 無料
主催・協力など	主催 : 神戸女学院大学音楽学部 協力 : 英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校、東京音楽大学
参加者数	9 月 20 日～ 23 日 神戸女学院生 15 名（1 年生 1 名、2 年生 5 名、3 年生 1 名、4 年生 6 名、院生 2 名）、卒業生 2 名、一般参加者女性 2 名 9 月 24 日 神戸女学院生 14 名（1 年生 1 名、2 年生 4 名、3 年生 1 名、4 年生 6 名、院生 2 名）、卒業生 2 名、一般参加者女性 2 名 子ども 29 名（小 1 年生 10 名（2 名）、小 2 年生 7 名（1 名）、 小 3 年生 7 名、小 4 年生 2 名（2 名））　＊（　）は男の子 教員・スタッフ 6 名、逐次通訳 6 名（院生 6 名）

〈事業概要〉

本事業の目的は、音楽を通し、誰もが持っているクリエイティブなアイデアや能力を引き出し、またコミュニケーション能力やリーダーシップなど、これから社会に飛び立つ学生にとって必要な力を実践的に身につけることである。

そのため、2016 年度 9 月 20 日からの 5 日間、英国ギルドホール音楽院リーダーシップ・コースの修了生であり、世界で活躍する若手の音楽家であるナターシャ・ジエラジンスキ（チェロ奏者・作曲家）、デッタ・ダンフォード（フルート奏者・作曲家）の 2 名を日本に招聘し、また同修了生で本学卒業生の東瑛子（ヴァイオリン）を講師として迎え、本学音楽学部生を対象とする音楽作りワークショップ（Creative Music Workshop）特別研修を実施した。

9 月 20 日から 9 月 23 日までの 4 日間は学生対象の研修を計 5 コマ、最終日の 9 月 24 日には学生の学びの仕上げとして、子どもたちを交えた形で、第 7 回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」を実施した（後者は、本学アウトリーチ・センターが定期開催している「子どものためのコンサート・シリーズ」の関連事業として実施）。

5 日間のワークショップ研修では、毎回全員で 1 つの大きな輪をつくり、身体をほぐしたり手拍子や息の音を隣の人に回したりするアイスブレイク

を行い、他者と一体となりながら自己表現していく力が芽生えていった。

１日目は、アイスブレイクを重点的に行ってから、学んだことを次に繋げていくための「リサーチ・プラクティス」についての説明があった。「考えを養い合うこと、私たちの考えが相手にとって意味があるということが大切である」と、ワークショップをする上で大切なことや、どのような意識を持って取り組んでいくのかが述べられた。次に、お互いがどんな人間か分かり合うため、「バランス・ホイール」というワークを行った。これは、Performer、Communication などのカテゴリーに分かれた円グラフに自分の点数を書き、自己分析や他者との比較を行った。

２日目は、今回のワークショップでどのようなことを全員で考えたいのかが講師から説明された。アーティストである自分を自覚すること、個人・グループとしてのありよう、自己主張と共に他者がどのように考えているのかを感じ取ること、一人ひとりの違いが音楽をもっと面白くすること、安全な状況を作りながら違うことをやってみる、ということが述べられた。その後、考え続けてほしい質問が入ったボックスを講師が持ってきた。学生の一人が「今日はどんな新しい扉を開けようか？」と書かれた紙を引き、全員で心に留めておこうと意識した。次に、息で風を送っていくゲームが行われた。二人組みになり、どんな音を作るのかを考えて発表し、他のグループのアイデアと繋げ、一つの大きな作品を作った。また、その音を図や絵に表すことで、感じたことを視覚的に見ることができ、作品についての理解を深められたようだった。最後に、楽器を用いて音楽作りも行った。葛飾北斎の『富嶽三十六景』の「山下白雨」をモチーフに、全員で即興演奏に挑戦した。

３日目は、ワークショップではどのようなことを考えていくのかを、より細かく学んでいった。周りと繋がるアンサンブルとしての統一感を持つ

ことや、心身･耳の準備をすること、「個人」と「グループ」としての体感を広げること、役割の流動性を持つことなどが提唱された。これらを完全に分けず、溶け合わせることが大事だと語った。

その後、グループに分かれ、約 10 分間のウォーミング・アップのプログラムを作った。朝の目覚めをテーマとしたグループや、「あいうえお」を色々なパターンで言うグループなど、それぞれの個性が現れていた。それぞれが発表した後、「子どもたちの前でもう一度先ほどのウォーミング・アップをするとしたら、何を変える？」などの質問を講師が学生に問いかけ、振り返る時間が持たれた。小さなグループに分かれて質問に対する考えを紙に書いていき、他のグループの意見も共有し合った。

次に、講師が分けたグループで『富嶽三十六景』よりそれぞれ一枚の絵を選び、曲作りを行った。

発表後は、質問やよかったところなど様々な意見を出し合い、十分にフィードバックを行った。そして、講師が「山下白雨」をモチーフとして作ったメロディを学生たちが覚え、その絵をモチーフにした歌詞を考え、アイデアを出し合った。一人ひとりのアイデアをうまく繋ぎ合わせ、人間と鳥の視点から富士山を見た歌詞ができあがった。

４日目は、翌日に向けた準備が進められた。前日作った歌を全員で何度も歌い、言葉をはっきりと発音したり、ニュアンスを強めたり、よりよくするために練習した。また、翌日の構成が講師から学生たちに細かく伝えられた。講師がアイスブレイク、歌、音楽、モンスターの４グループを設定し、グループごとに分かれて、どのように翌日進めるのかを相談し、練習していった。学生が反省点を述べたり、講師のアドバイスを受けたりした後、子どもたちと作曲するためのグループを講師が新たに分けた。グループごとに選んだ絵について、どんな場面だと考えるのかを説明し、選んだ楽器も紹介していった。最後に講師から、「準備

はしておくが、何事にも柔軟性をもって対処していってほしい」とアドバイスを受け、翌日に備えた。

いよいよ最終日の9月24日には、小学校1年生から4年生までの29名を交えて、第7回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」が開催された。子どもたちは、各自持参した楽器や、本学で用意した小物打楽器などを持ち、音楽作りに参加した。講師の挨拶と紹介の後、参加者全員が一つの大きな輪になり、学生によるアイスブレイクが行われた。前日に練習したときの反省点が活かされ、安定感があった。

アイスブレイクの後は、絵をモチーフに、グループごとに音楽作りが行われた。まずは、それぞれのグループでグループ名を決めて発表した。子どもたちの意見が取り入れられ、動作もついたグループ名が披露された。次はいよいよ音楽作りが始まり、別々の部屋に分かれて、どんな音楽にするのか意見を出し合った。学生は子どもと積極的にコミュニケーションをとり、絵に描かれている人物がどんな気持ちなのか、どんな季節なのかなど、子どもたちの想像力を引き出し、絵のイメージを膨らませていった。そして、子どもたちから出た「こんなふうに演奏したい」というアイデアに講師のアドバイスも加わり、音楽がどんどんできあがっていった。

ワークショップの締めくくりとして、保護者が観客席で見守る中、作品発表を行った。演奏の前には、どんなテーマの中で創り上げたのか、何を表現したいのかを子どもたちが発表した。発表の後、途切れることなく、グループごとに次々と演奏していった。前に立ったリーダーの指示が子どもたちにうまく伝わるように、学生たちも連携して注意を促していった。子どもが指揮し、グループの音楽をリードする場面や、保護者も手拍子で参加したり、演奏を聴いている別のグループが振付をつけて加わったり、一体感のある雰囲気となった。

最後に、作品発表について学生や子どもたち、保護者とディスカッションを行った。グループごとにディスカッションし、子どもたちは一人ずつ紙に感想を書いたり、絵を描いたりして振り返った。保護者からも感想を発表してもらい、子どもたちの目が生き生きとしていたことや、ワークショップの重要性などが語られた。

また、子どもたちが帰った後、学生と講師陣で、最終日と研修会全体についてのディスカッションを行った。他者のよかったところを発表していった後、言葉を介さず、それぞれのグループで起こったプロセスを紙に書いて振り返った。そして、「2日目にみんなで心に留めた、どんな扉を開けたのかという質問に、今の自分はどう答えるか」「大事だと思った瞬間は何か」「自分の中の疑問は何か」という3つの質問を一人ひとりが紙に書き、自分をしっかりと見つめる時間が持たれた。

研修会後のフェアウェル・パーティーにて、その質問に対する答えを一人ずつ発表していった。「夢中になって周りが見えなくなってしまった時はどうしたらいいのか」と学生が質問した際、声を出して体を動かしながら質問に答えていくゲームで練習してみることを講師が提案し、盛り上がりを見せた。学生たちの質問や感想に講師の経験やアドバイスが語られ、学ぶ意欲の溢れる時間となった。

なお、全日程を通じて本学大学院通訳コースの院生6名が交代で逐次通訳を行い、相互理解を助けてくれたことを記して感謝する。

〈参加者の声〉

・初めてワークショップに参加しました。今まで、作曲や音階のある楽器の演奏に苦手意識がありました。しかし、デッタ、ナターシャ、エイコが背中を押してくれました。私にも演奏（即興の）やワークショップのリーダーを務めることができるのだと思いました。子どもたちとも1日でしたが、

とても深い交流ができて、とてもうれしかったです。（声楽 / 4年）

・今回で3回目の参加でした。今までで一番充実していたかもしれません。それは自分がリーダーとしての立場を理解し、実際に子どもたちを引っ張っていくことができたからです。4日間でデッタ、ナターシャ、瑛子さん、そして学生の皆からたくさんのヒントを学び、本番で子どもたちと一緒にその成果を発表することができ、胸一杯になりました。（ピアノ / 4年）

・一緒に一から音楽をする楽しさをもっと多くの子どもたちと味わいたいです。リーダーとしての力をたくさん学び、人をひきつけるにはどうすればよいか考え、答えを見つけていきたいと思います。音楽ワークショップの魅力を下級生にも伝え、来年のワークショップに一緒に参加できるようにしたいです。（ピアノ / 4年）

・もし来年もあるなら必ず参加したいので、悔しかったこと、反省点、嬉しかったことをできる限り忘れずにいたい。反省点はしっかり改善できるようにしてから臨みたい。また今回、講師の使う（選ぶ）言葉がとても明るく、ポジティブな気持ちでいられたことに感動したため、私もそんな人になりたいので、普段からそういった言葉を使っていくようにしたいと思う。（ピアノ / 1年）

・チャートを描くことによって、具体的に視覚として自分を見つめ直すことができました。ワークショップ以外のことでも、このホイールをやってみたいと思いました。（声楽 / 4年）

・毎回が新鮮なことであふれていて、人間的にとても成長できたと感じました。人から受ける音楽（音）、空気をしっかりキャッチし、発信する。その過程を言葉を介さずに自然にできることが感動でした。しかし、それを子どもたちに空気感だけで伝えられるのか、私は初めてだったので確信が持てなかったのですが、土曜日に子どもを実際に迎えてみるとそんな不安はなく、きちんと準備した合図は子どもにも大人にも通じるものがあるところに魅力を感じました。（ピアノ / 1年）

・相手の意見を聞いて、さらに誉めていた3人。私も人が話をしている時、意見をしている時に割って止めてしまわずに、最後まで聞いてそれを膨らます習慣をつけたい。どんなに不安でも自分を信じてあげること。大丈夫と。それが自信につながるから。（声楽 / 4年）

・見たこともない楽器があり、何より短い時間でこれだけ楽しい作品ができあがって、子どもたちの集中力もすごいなあと思いました。「音楽」＝音を楽しむという意味にピッタリな感じでした。（保護者）

・初めて発表会を拝見させて頂きました。レベルの高さに驚きました。リーダーや学生さんたちの指導のお蔭で、1日で音楽作りが子どもたちにもできるなんて、すばらしいと思いました。子どもたちには生まれ持って、音で自由に表現する（表現できる）力があることを教えられました。（保護者）

・浮世絵からこのようなすばらしい音楽ができるなんてとても素敵でした。どのグループも聞いたことがあるようなフレーズは一つもなく、全てが創作であることがわかり、たった1日で30分もの演奏ができあがることに感動しています。本当にありがとうございました。（保護者）

・日本の絵画作品から生み出されてきた音がすごく広がりを持ち、思いがけない音になっていて、すごく楽しめました。（保護者）

おわりに

音楽の力を伝えることのできる学生を社会に送り出すべく、今年度も 2 大学を結ぶ中継授業を軸として、さまざまな試みを行いました。

昨年に引き続き、デッタ・ダンフォードとナターシャ・ジエラジンスキのお二人を講師に迎えての特別セミナー／特別研修は、多くの学生に強いインパクトを与えました。これは音楽の力のみならず、お二人が発散する「誰のアイディアにも耳を傾け、皆に目を配る」優しさと豊かな音楽性に満ちたリーダーシップのなすわざだと感じます。学生たちには、ワークショップをリードするためのノウハウばかりでなく、こうした側面も大いにお手本にしてほしいと思います。

また今年度は、エル・システマジャパンの相馬プロジェクトについて学び、2 大学の代表が相馬でワークショップをリードする機会をいただきました。音楽をもって社会に出ていくにも様々な方法があり、お互いのやり方を尊重しつつも助け合い補い合っていけるとしたら理想的です。私たちはワークショップやインタラクティブ・コンサートの実践と同時に、それについていろいろな人と語り合う力を養い協働の場を広げていけるように、今後も努力していきたいと思います。

本取組の遂行にあたっては、学内外の皆様からさまざまなご支援をいただきました。関係の皆様に心より御礼申し上げますとともに、今後さらに社会で活躍する卒業生を輩出することにより応えていきたいと存じます。

2017（平成 29）年 3 月

武石みどり（東京音楽大学音楽学部 教授）

共同プロジェクト
音大連携による教育イノベーション ～音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

平成 28 年度　活動報告書

平成 29 年 3 月　発行

発行者　東京音楽大学　連携センター
〒 171-8540　東京都豊島区南池袋 3-4-5
Tel:03-3982-3513 Fax:03-3982-3227

編　集　神戸女学院大学音楽学部　連携ルーム
東京音楽大学　連携センター